令和５年度　森のいえはまきた事業報告

社会福祉法人雄気の里会
幼保連携型認定こども園

森のいえはまきた

1.　在園児数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
5歳児	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
4歳児	24	24	24	24	24	24	25	25	25	25	25	25
3歳児	26	26	26	26	26	26	27	27	27	27	27	27
2歳児	17	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
1歳児	15	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
0歳児	10	10	11	12	13	14	14	15	15	15	15	15
合計(人)	117	119	120	121	122	123	125	126	126	126	126	126
利用率(%)	91.4	92.9	93.7	94.5	95.3	96	97.6	98.4	98.4	98.4	98.4	98.4

2.　課外授業

学研教室　8名　／　ECC　29名　受講

3.　年間行事

4月　入園式　引き渡し訓練
5月　親子遠足　内科健診　口をはぐくむ教室（5歳児）　交通教室（4・5歳児）
6月　歯科健診　参観懇談会　ボディペインティング
7月　七夕会　プール開き　健康づくり教室（5歳児）　花火教室
8月　夏季希望保育　夏季休暇（1号認定）
9月　自衛隊基地見学（5歳児）　Hondaサッカー教室（4・5歳児）
10月　運動会　内科健診　ちびっこキッチン（5歳児）　交通教室（3・4・5歳児）　ハロウィン
11月　個別面談（5歳児）　園外保育（3・4・5歳児）
12月　生活お披露目会　クリスマス会
1月　ダメ！たばこ教室（5歳児）
2月　豆まき　懇談会　交通教室（5歳児）　もりっこマラソン
3月　ひな祭り会　卒園遠足（5歳児）　卒園式　春季休暇（1号認定）

4.　令和5年度重点目標

（1）　虐待防止に対する取り組み

令和5年度も不適切保育についてのニュースが多数報道され、浜松市内の園についての報道もされることがあった。余裕のある人員配置を維持し、職員間で話し合う時間も定期的に確保することで、職員同士連携をとり、意見交換を行える場を設けることができた。しかし、業務に追われる中で、多くの園児をお預かりしている責任の重さや子どもの様々な反応に心が揺れ動く職員もいた。そのような職員がいた際には、園児の対応を他職員が交代したり、その時の言動について全職員で振り返ったりする機会を設けた。若手職員からは、自分の言動を取り上げられると責められている

ように感じるという意見もあったが、日々の保育を振り返る大切な機会であると考え、職員へも振り返る必要性を伝え定期的に行った。日々の保育の中でも気になる言動があった職員には、職員同士で声を掛け合うよう心掛け、一つ一つの言動を意識するようになったと感じる。

たびたび取り上げられるニュースを見聞きすることにより、子どもに対する必要な指導や注意ですらもどのようにしたらよいのかわからなくなり、集団生活の中で守らなければならないルールや危険な行為をどのように示していくのか全職員が迷っている。まずは、保護者との会話を大切にし、保護者と足並みをそろえていくことが必要であると職員間で共有し、引き続き子どもたちにとってより良い環境となるよう努力していきたい。

（２）　個別対応が必要な園児の対応、保護者との連携

今年度も児童発達支援施設との並行通園をしている園児、支援は受けていないが支援が必要と思われる園児が多く在籍しており、対応に悩むことも多かった。浜松市の発達支援巡回事業や児童発達支援施設からの保育所等訪問事業にて個々に合わせた対応方法を相談し、模索した。9 月から児童発達支援センターひまわりの心理士、保育士による児童発達支援グループ活動（以下、おひさまグループ）を園内で月 2 回実施することとなった。４・５歳児の支援が必要と思われる園児の保護者へ参加を促し、同意いただけた親子 4 組でスタートし、半年間のみでも目に見える成長が感じられた。また、園職員も児童発達支援センターひまわりの心理士、保育士に指導していただいたり相談させていただいたりすることで、どの園児に対しても日々の対応が少しずつ変わってきていると感じる。次年度もおひさまグループは継続となるため、職員だけでなく保護者とも足並みをそろえて個々に合わせた支援をしていきたい。

保護者との連携については、課題が残る。おひさまグループに参加している保護者のように、すでに児童発達支援を受けている園児や専門機関へ相談済みの園児の保護者とは定期的に面談を行った。面談で家庭での様子、園での様子について情報を共有し、保護者と相違なく子どもの対応ができるよう努め、連携を図ることができたと感じている。しかし、まだ支援に繋がっていない保護者へは、園での集団生活の中で気になる点を少しずつ伝えるが、「家では困っていない」「家では落ち着いている」と集団生活と家庭での生活との違いを受け止められない保護者が大勢いる。受け止められないという思いがあるのも当然のため、今後も少しずつ園での様子を伝えつつ、無理強いはせず、一緒に子どもの現れを考えていけたらと思っている。